
デジキャラット・シンフォニー5

細川智仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジキャラット・シンフォニー5

【Nコード】

N3100T

【作者名】

細川智仁

【あらすじ】

この本は、私が愛知万博の頃、2005年夏から1年間にわたって書き下ろした「デジキャラット・シンフォニー」の4部作をまとめて再編集したものです。

65、M i n t の夢列車

M i n t がスターになるにつれてその才能のすごさが分かってきたが、M i n t の父、久弥に関する質問も多くなった。でじこたちのように久弥を神様としてあがめている人もいれば、原口派の残党の流れをくむ批判勢力もいたのである。産業技術記念館を焼いたのもそうした輩だった。M i n t はこれらに対しては軽く受け流していた。久弥としては他人の評価を気にしたところで何にもならない、自分の仕事をやることだけに力を注げばいいと生前よく言っていた。しかし久弥に対する批判がM i n t に集まるのにはさすがのM i n t にとつても重い負担だった。

ある日、名古屋栄の「オアシス21」でのライブでとうとうM i n t は怒ってしまった。

生前、久弥が「名古屋市営地下鉄の線路は東京の営団地下鉄までつながっている」との発言をしたのだが、名古屋市民でさえがほとんど笑いのにしたのであった。あるテレビ局のキャスターがM i n t に「父上の夢物語を信じていますか？」などと聞いた。これにM i n t が大激怒したのである。

「お父様の悪口は許しませんわよ！お父様は実現不可能な事は決して発言しませんでしたわ！」

「確かに平田親子の言ったことで本当にならなかったことはないんですよ」

そこへぷちこがやってきてM i n t に耳打ちした。

「できるかどうかやってみればいいにゅ」

「そ、そうですね。何事もできないと思うからできないのですわ」

数日後、M i n t は別の放送局に企画書を持ち込んだ。

「平田久弥前東京都知事追悼特別企画―M i n t の夢列車」

それはM i n t 自身が父・久弥の思い出を語りながら列車に乗って

東京を目指すと言ったものだった。

半月ほどして、名鉄の赤い列車にM i n tのヘッドマーク付きの特
別列車が新岐阜駅のホームに停車していた。

「まさか、これで東京まで行く気かによ？」

「久弥さんを信じるにゆ」

ヘッドマークには「新岐阜―取手」と記載されていた。
発車すると同時にM i n tが歌いだした。

思い込んだら 試練の道を 行くが男の ど根性

世界に誇る 日本の歴史 休む間も無く 進歩する

血の汗流せ 涙をふく 行け行け 平田歴史学

夜明け前にも 冷たいつゆが 落ちては光る 上本町

平田教授が 告げていた 希望を示す 十字星

星の光が 見えるまで 行け行け 平田歴史学

夢を持たぬ 人々に 時が変わると 声がする

久弥が愛した 有楽町の 暗い夜空に 光差す

今宵も輝く 南十字星 行け行け 平田歴史学

いつのまにかでじこもこう口ずさんでいた。

「思い込んだら 試練の道を 行くが男の ど根性」

でじこはこの歌詞が気に入ったらしい。列車は犬山を経て上小田井
から地下鉄に入った。外が見えないためでじこたちは歌ってばかり
いた。やがて列車は赤池から再び地上に出て豊田市へ、さらに知立
を経て豊橋へ向かった。このころになると車内はもはや宴会場にな
っていた。

「この歌はかつてお父様がコミケで行列の時に歌っていたものを作
り変えましたの」

それはこんな歌詞だったと言う。

思い込んだら 試練の道を 行くが男の ど根性
世界最大 60万人 ビックサイトに 集まれり
血の汗流せ 涙をふくな 行け行け コミケ どんと行け

日差しを浴びる 夏コミも 木枯らしすさぶ 冬コミも
苦難に耐えよ 男じゃないか 今日もはるばる 地方から
命と郷土の 誇りをかけて 行け行け コミケ どんと行け

自分の作った 本を持ち ビックサイトに やってきた
世界に誇る 日本の文化 祭りは年に 2回だけ
悔いなく動け 後ろを向くな 行け行け コミケ どんと行け

「コミケは苛酷な環境と聞いています。父上も体が丈夫な人ではありません、歌でも歌わないととても耐えられなかったのでしょう」

「そういえば久弥さんはなんかあるとすぐ歌を歌っていたにゅ」

「あんなかつたるい環境が苛酷かによ？」

「かつたるいですって？」

「Mintさん、コミケは参加者の8割以上がMintさんとほぼ
同年代の女の子だによ」

「なんですって？父上はいつも名古屋の自宅を出る時遺書を残して
いきましたわよ」

「女の子がほとんどの環境では久弥さんの存在自体が異質だったん
だによ」

「久弥さんより女の子の方が体力があるにゅ」

「確かに女の子が大半と言うなら何人かで襲われたらひとたまりも
ありませんわね。父上はコミケで爆弾に襲われてやけどを負って帰
ってきたこともありましたわ」

「爆弾じゃなくて爆竹にゅ」

「時々そういうバカな奴らもいるからでじこみたいにずるがしこくなきゃ歩けないよ」

「久弥さんの最大の欠点はまじめすぎたことにゆ」

「ああいう人がコミケで生き残るんだによ」

でじこが指差したのはラッパを持った邦俊だった。でじこの目には邦俊は平田一族の大ばか者としが写らなかった。

「そうかしら？ 邦俊さんは平田一族では一番の切れ者と言われているわ」

やがて邦俊のラッパの曲が変わった。それを機にM i n t たちがいきなり踊りだした。

「踊りゝ踊るならゝチヨイト東京音頭ゝヨイヨイ」

でじこはあきれ果ててしまったが、ぷちこはつぶやいた。

「ばかと天才は紙一重にゆ・・・」

豊橋に着くと車内はすでに盛り上がっていた。列車はそのまま東海道線に入り、浜松あたりまでこの盛り上がりは続き、さらに邦俊の曲は「大東京音頭」に変わっていった。

もともとお祭り騒ぎが大好きなでじこのことである。しまいにはでじこまでが歌い踊るようになってしまった。これにはぷちこもあきれてしまった。

「でじこが一番の大ばか者にゆ」

そのうちに列車は沼津駅に到着していた。するとM i n t と邦俊は何を考えたのかパックを取り出した。数分後二人はパックを抱えて戻ってきた。パックの中にはおでんが入っていたのである。おでんといえは名古屋の味噌おでん、関西では「関東煮」と呼ばれているが、静岡県で多く消費されていることは実はあまり知られていない。おでんの材料に必要な海産物の調達が容易であったことと気軽に食べられるため発達したのである。ことに沼津駅のおでんは久弥が見つけた隠れた名物でもあった。それもそのはずこのおでん屋は50年以上も駅で営業していたのだ。

「味が染みてておいしいによ」

「久弥さんの舌はまちがいにいぬ」

列車が沼津を離れると車内はいきなり静かになった。M i n t が「おおシャンゼリゼ」を歌いだした。M i n t の思い出話は祖父・道明から父・久弥へと変わったのだ。久弥を語るには中の良かったいとこ・美香の話もしなければならぬ。美香のデビュー作「ガイズ&ドールズ」、出世作「哀しみのコルドバ」「ミー・アンド・マイガール」、そして美香の最大の当たり役、「サクラ大戦V」のジェミニに至るまでM i n t は美香を見続けてきた。美香の舞台は欠かさず見に行っていた久弥、しかしその存命中に美香が主役となった舞台を見ることはなかった。「サクラ大戦V」の初演は久弥や美香の親友だったうさだあかりがこの世を去ってから半年後のことである。この時アリーナ席に座っていたでじこの後ろで久弥とあかりの写真を手に持つてじつと舞台を見つめる少女がいた。半年後にデビューするM i n t の姿である。美香はでじこには明るい笑顔で応えたが、M i n t の持った久弥の写真を見ると目頭を押さえていたと言う。やがて列車は御殿場を経て松田駅に到着した。

「ここが父上の考えた夢列車の最大の見せ場ですわよ」

列車はそのまま小田急に入った。

「すごいよ！岐阜からそのままアキハバラへ向かっているによ！」

「父上は無理な計画は絶対に申しません」

しかし、都心に近づくにつれ、なぜか人々の動きがあわただしくなっていた。

「何が起こったのでしょうか？」

海老名でいきなり列車が止まった。信号が赤になっていて変わらぬのである。原因は故障ではなかった。海老名駅長がわざと信号を赤にしていたのだ。すぐさま駅長は列車内に乗り込んできた。

「申し上げます！三菱重工相模原で暴動が起っております！」

「なんですとによ！」

「都内各地で暴動が起っており、このまま列車を進めるのは危険かと・・・」

「どこまでなら大丈夫なんですの？まさかこの先で線路が寸断されているとか？」

「なにぶんにも連絡用の回線が切られているもので何とも言えませんが……。とにかく新宿駅や地下鉄の駅に連絡しても通じないのは確かです」

「相武台前や座間で線路が切れていると言うことはありませんかね？」

「その辺は大丈夫かと思われます。三菱重工相模原からはだいぶ離れておりますから……」

「それなら町田まで動かせませんか？」

「多分そのあたりが限度かと……」

「町田までも動かせばいいんですの。父上の言うとおり名古屋から東京まで線路がつながっていることが証明されますから。それに町田ならいくら暴動が起きたとしても必ず説得できますから危険なことはございませんわ」

「Mintさんでしたっけ、あなたのお父上といえますのは？」

「私の本名は平田文子、平田久弥の娘ですわ」

「えっ？あの元都知事……。するとおじいさんは平田道明東大教授……」

驚いた駅長はすぐに列車を発車させた。同時にいろんな駅に電話をかけまくった。

「こんな時に列車を動かしたのか？危険ではないか？」

「ですが、相手が相手ですから……」

「相手？売り出し中のアイドルだろう？」

「それが並のアイドルとは訳が違います。なにしろ平田元都知事の娘だそうで」

「なにっ？あの？」

驚いた各駅では一斉に動きがあわただしくなった。列車は50キロに速度を落としたが、進み続けていた。

「Mintさん」

座間駅ではミルフィーユ秘書が待っていた。

「あら、どうしたのですか？」

「M i n tさんが来るということで、すでに町田駅では歓迎の準備が進んでいるんです」

暴動は起きたが、小田急線からかなりはなれたところであった。町田には重い雰囲気ではあったが暴動の危険からは免れており、町田駅で警察が警備に当たっている他は特にこれといって混乱はおきていなかった。座間市はミルフィーユ秘書のふるさつである。だがさすがは強運のミルフィーユ、平田一族は座間市に入ると道明や久弥をはじめことごとく危ない目にあつて帰ってきたからだ。M i n tたちはあわてて列車を出した。

15分ほどして列車は相模大野駅を通過した。

「いよいよ町田ですわ・・・」

境川を渡り町田駅に到着するとひととき大きな歓声に包まれた。確かに暴動は起きたが、手荒い歓迎だった。M i n tはでじこたちを連れて町田駅前に出た。町田駅前の歩道橋はかつて久弥がでじこを連れて演説を行った場所である。

「今になってお父様のおっしゃられたことが分かる気がします・・・」

「

「おまえ今頃久弥さんの偉大さに気付いたのかによ？」

「お父様が都議会議員になる前、私はお父様に言いました。選挙に出て負けたら生活どうするのと。するとお父様はこう言ったのです。『私は歴史家だから2年3年先や自分の将来など見るなどなどともできない。100年以上先の日本全部を見ているのだから』お父様の目にはそんな先の未来しか見えていないのかと不思議に思いましたわ。100年先なんてお父様はもちろん私もこの世にいません。でもお父様は勝ちました。お父様の目には本当に未来が見えていたのですわ」

しかし、そんなM i n tの元に一報が届く。

「申し上げます！平田図書館が焼き討ちにあいました！」

「ええっ？」

平田図書館とは町田市にあった生前の道明・久弥親子の邸宅を久弥が亡くなった後に残った蔵書約6000冊をもとに司書資格を持つミルフィーユ秘書を図書館館長兼司書として開館した小さな図書館である。M i n t にとつては生家でもあった。

あわててM i n t たちが平田図書館へ行ってみると、建物は全焼していた。幸か不幸か蔵書のほとんどは地下の閉架式書庫に収められていたため焼いたのは三十冊程度にとどまった。しかし、M i n t が大事に保管していたステージ衣装やぬいぐるみなどは全て失われてしまった。M i n t は泣きながらその場を立ち去り、近くの歩道橋の上へ走った。するとぷちこも歩道橋の下へと歩いた。M i n t はしばらく泣いた後、歩道橋の上から身を乗り出して飛び降りた。

「めからびーむ」

すかさずぷちこがめからびーむを発射し、M i n t はその上に落ちた。大騒ぎするM i n t にぷちこは手を差し伸べた。

「はなしてください、お父様のお屋敷や衣装がみんな燃えてしまった今となつては私の生きている意味がありませんわ！」

「それでお前のおやじが許すとも思っているのかにゅ」

「その通りだによ」

「でじこさん・・・」

「ここでM i n t さんがあの世に行つたとして、久弥さんが喜んで迎えてくれると思うかによ！」

「久弥さんは親子の縁を切ると言い出すにゅ」

「なんですって？」

「久弥さんは自分のやりたい仕事がたくさんあったのにそれをやらないで死んでいったんだによ。さぞかしもつと生きたかつたんだによ。久弥さんは死ぬ直前に言っていたによ『君たち、どんなことをしてでも生き延びるよ』でじこたちは久弥さんの最後の弟子として生き延びて陽明学の世の中を作る義務があるんだによ。生きていれば必ず最後にいいことがあるによ」

「悪い奴らは上本町の南十字星の光を浴びて滅びるにゆ」

「その通りだ、伯父上も言っていたではないか、「死んで花実が咲くものか」と」

「邦俊さん！」

「ここまで見事に焼けてしまつとはな・・・」

「邦俊さんはどうする気？」

「なに、ホテルの支配人が当分宿を提供してくれるってさ」

「それにしてもなぜ平田図書館が？」

「生前、じいさんのメインバンクは旧三菱銀行だった。じいさんが幼少時に下関にいたのだが、下関は重工の造船所がある関係で三菱銀行の力が強かった。それがそのまま町田の平田家につながっていたのだ。その関係で邸宅の位置が三菱銀行の支店に近いところにおかれたのだ。それが今回あだになった。重工側に敵対しているのは三菱東京UFJ銀行だからな」

「平田先生に恩を受けておきながらひどい奴らだによ」

翌日、M i n t はみずほ銀行町田支店の貸金庫にでじこたちを連れて行つた。

M i n t が貸金庫の中から取り出したのは、証券会社の口座明細だった。

「これはお父様が生前さまざまな方法で運用した資金、時価総額で11億4千万円ほどございますわ」

その金額を聞いたとたん、でじこはひっくりかえってしまった。さらにM i n t はそれをでじこに渡すのだった。

「でじこさん、これはあなたに差し上げます」

これに血相を変えたのはうさだだった。

「こ、こんなやつに11億4千万もあげますって？M i n t さん何考えてんのよ！」

「これはもともとお父様が不本意な手段でもうけたものですわ。ないほうがいせいにしますわ」

「まさか、久弥さんが不正手段でもうけた隠し財産ですかによ？」

「政治家なら必ずあるにゆ」

「ちがいます」

Minntがでじこに渡した資産は、生前の久弥が合法的な資金運用で築いた資産だった。但しその方法が卑劣だった。倒産寸前の会社に投資して荒利を稼ぐ「パニック・ファンド」やドルが円安になればなるほど儲かる「日本叩き売りファンド」などの手法でこっそり稼いでいた資金である。

「お父様の『日本叩き売りファンド』は当時二十数億円もあったといえます。雪だるま式に膨れましたが、お父様は決して自分の政治資金や生活費にこのお金を使うことはありませんでした。『日本人が日本を叩き売るなど国そのものの将来を信じなくなるようなばかげた世の中は長く続きはしないよ。いずれはその反動でナシヨナリズムが高まる世の中が来る。このお金はその時に国を守るために使ってもらう』。お父様はでじこさんに世の中の建て直しを期待しておりました。ですからこのお金はでじこさんが受け取るものですわよ」

66、飛ぶ教室

でじこはそのお金はありがたく受け取ったが、有り余るお金にはあまり興味がなかった。それよりも本に夢中でぶちこと二人で平田図書館の後片付けを名目に本を読み漁っていた。平田図書館の片隅に「子供と識者のための文庫」と言うコーナーがあった。そこには道明が集めた数々の児童文学が保管されていた。そこにはこう記してあった。

「この場所には子供たちのための本を集めたが、読む人は子供に限らない。そのため私はここを「子供と識者のための文庫」とした。子供たちが大きくなっても必ずここへ帰ってこれるように、帰ってきたら子供たちは識者になっっていることを願っている」

中でもエーリッヒ・ケストナーの作品は道明が好んでいたのである

う、「エーミールと探偵たち」、「点子ちゃんとアントン」、「飛ぶ教室」、「五月三十五日」、「二人のロッテ」、「動物会議」などがあつた。不思議なことに「私が子供だったころ」はケストナー著と平田道明著の2つがあつた。たぶん平田先生がケストナーのまねをして書いた本なのだろう。邦俊はそれらの本の解説を引き受けた。さすがは「ラブソドス団」の団長である。邦俊の語り口はでじこたちを飽きさせることはなかった。

そのうちにでじこは「飛ぶ教室」に興味を持ち始めた。この作品は杉本侍従長が学生時代に夢中になった作品である。そのため語りにむりやり杉本侍従長が割り込んできた。当然ぴよこも一緒だった。「飛ぶ教室」は地理の授業に実地検査をすると言つて世界中あちこちを飛行機が飛び、最後に天国に迷い込む物語である。杉本侍従長はペテロになりきつて演じていた。

いよいよ平田道明の「私が子供だったころ」のお話が始まつた。

道明は北九州門司で生まれ、下関で幼少時代を過ごし、京都で成人した。その後大阪や名古屋で教授を歴任し、最後には東京大学教授になる。昭和初期の下関で好み焼きを「洋食」といった。当時はソースさえかければ何でも洋食とみなされた時代であつた。当時の門司や下関では外国航路の船や捕鯨基地として賑わい、バナナの叩き売りの声が町にあふれていた。下関条約の締結に使われた「春帆楼」は明治時代から存在したが、ふく料理が下関の名物となつたのはもつと後の時代になつてからのことだつた。道明は春帆楼での宴会は子供には退屈だつたと記してある。道明の「洋食」も時代と共に変遷した。終戦直後にはキャベツ以外何も入っていなかったが世の中が発展するにつれて具が増えていき、まず紅しょうがが入り、次いで天かすが加わつて、豚肉が加わり、アオノリやマヨネーズ、かつお節が使われるようになったのはごく最近のことだと記してある。最後に道明は捕鯨の重要性について説き、いくつかのクジラ肉の料理法と捕鯨の方法について記した後、「私の存命中に商業捕鯨

が再開されることを願う」と記して終わっている。

「でも、平田先生の願いはかなわなかった」

「平田先生は飲んだくれていたことが多かったによ」

「あんな固い肉のどこがうまいのかにゆ？」

「15年前までは庶民の肉と言えばクジラだった。あのころの日本はクジラを世界で一番とっていたんだ。給食にも出たくらいだ。そのころは牛肉やビフテキなどなくてね・・・」

「そういえばお父様もほとんど牛肉は召し上がらなかったですわ」

「私が久弥を誘った時にも焼肉とかはいやがっていた。平田先生はよく飲んだが、久弥は全く酒はだめだったからね。喫茶店しかなかったよ」

67、黄色いリボン

さて、三菱重工横浜製作所では一隻の小型船が完成した。でじこの友人、みけのための釣り船にしては小ささか大きい船である。みけと意気投合した邦俊は、みけにシイラを釣ってこいと言いくるめて三菱重工に船を作らせた。いよいよその進水式となり、邦俊とミルフィーユ秘書が見守る中、みけが乗り込んだ。

「久弥さん、シイラいっぱい釣ってくるみゃ！」

「うむ、生きのいいのを期待してるぞ」

そうして船が進水しようとしたときだった。数人の重工社員が邦俊とミルフィーユ秘書の周りを取り囲み、二人をす巻きにして船へとほおりこんだ。

「これはいったいどういうことですか？」

すると一枚の紙がす巻きにされた邦俊の上に落ちた。それは邦俊をシンガポール事務所に左遷する辞令だった。

「追放か・・・」

みけは船を漕ぎ出すことに夢中だったため、それに気付いたのは船が沖へ出てからだった。あわててみけは二人のひもをほどいたが、すでに船が沖合いへ出た後だった。

「申し訳なかつたみゃ」

「いいんだ、これも運命だろう・・・」

「すぐ引き返すみゃ」

「いや、このままシンガポールに行こう。シンガポールは世界最大の漁港だ、魚市場もあつて活気にあふれている。みけちゃんの修行にはいい場所だよ」

そういうと邦俊は自ら海図を持ちシンガポールへ向かった。

重工と銀行は激しく対立していたが、資金がなければ事業ができないので結局は重工が折れて銀行と和解することになった。そうなる
と重工にとって邦俊の存在が邪魔になるため谷口社長は邦俊をシンガポールへ左遷したのだ。邦俊はシンガポールで机を与えられても何もすることがなかったので、会社に出社しなくなり、早朝にみけを送り出した後、毎日ノートを持って町を歩き回っては夕方に魚市場にみけを迎えにいくといった生活だった。ミルフィーユ秘書もお気楽に生活していた。

このいきさつをきいたでじこたちは激怒した。

「どいつもこいつもうそつきばかりによ！」

この時、M i n t は全国ツアーに出ており、美香はアメリカ公演、今村禅師はいつものように全国行脚に出かけており、平田邸にはでじことぶちことゲマしかいなかった。

「でじこ！どこ行くゲマ！」

「決まっているによ！三菱重工に天罰下しに行くによ！」

「やめるゲマ！誰か帰ってくるまで待つゲマ！」

ぶちこはそんな騒ぎをよそに一人地下室へ向かった。

平田邸の地下室には、厚いコンクリートの扉に閉ざされた部屋があった。ここはもともとは道明が冷戦の激化で核戦争が起こった時に備えて核シェルターを作った場所だった。だが冷戦終結でその危険がなくなったため、久弥はこの部屋の存在を忘れて放置しておいたのだ。それをでじこが見つけてきれいにした。めんどくさがりので

じこがこの部屋を掃除したのは、先の戦いで一緒に戦った人形たち6体をここに閉じ込めてしまったためだった。それはかつて道明が所有していた7体ある「ローゼンメイデンシリーズ」の人形のうち、でじこたちが倒した「水銀燈」を除く6体をここに閉じ込めてぜんまいを抜いて箱にしまっておいた。

「これでうるさい奴らは二度と目覚めないによ」

おまけにでじこは扉を閉ざすと放射能の標識に使う三角形の黄色いシールを貼り、「危険！放射能あり！」と大きく書いた。これを知っているのはぶちこだけである。

ぶちこはこのドアを開けて6体全部のぜんまいを巻きなおした。すると全員が目覚めて動き出したのである。居間でくつろいでいたでじこは驚いた。

「によ？なんでお前らがいるのかによ？」

「ぶちこが起こしたにゅ！」

「ぶちこ、こんな時に余計なことするんじゃないによ！」

その時、金糸雀がバイオリンを弾き始めた。

「聞いたことない曲だによ」

すると、ドアが開いた。

「それは「黄色いリボン」ですね」

「渡辺さん」

傍らにいたのは久弥の親友、渡辺華仁だった。

「黄色いリボン、久弥の都議会議員時代のテーマソングだった」

「ワルディング・マチルダじゃありませんの？」

「久弥は平田教授の七光りで輝くことを嫌っていたらしくてな」

生前の道明は息子の久弥には自分と違うとてつもない才能があることを見抜いていた。そのため久弥には自分と同じ学問の道には進まずに好き勝手にやらせた結果、久弥は政治家に進み、都議会議員に当選した。親の言うままにならずに好き勝手やって来た久弥である、父親の影がかかるのは嫌がっていたのかもしれない。

久弥が都議会議員に当選した当時、議員は議場に入場する際、テ-

マソングを鳴らして入場していた。後に久弥が都知事になったためにでじこたちは聞いたことがなかったのだ。久弥の死後一度だけ議場に「黄色いリボン」が流れた時がある。それは久弥に反対していた原口派が都議会を解散して人民議会を作ろうと画策していたときに、これに反対した渡辺が久弥のテーマ「黄色いリボン」のメロディーに乗って登場した。これには議員たちは啞然としていたが、傍聴席を埋めた一般市民たちは拍手喝さいをあびせた。

「おおっ！「黄色いリボン」！平田久弥のテーマだぜ！」

「渡辺さん！がんばってください！」

最後には原口派は久弥の遺志を受け継いだでじこたちが倒してしまふのだが・・・。

「渡辺さん、でじこはバカたちを退治しに行くによ！さあ、どこによ！」

「でじこちゃん落ち着いて、まあゆっくり話そうか」

渡辺は何とかでじこをなだめようとした。

「まず久弥に最初から反旗を翻した銀行は有楽町駅の北側にある。

しかしここは手を出すには及ぶまい」

有楽町と東京駅の間にあった銀行の本店ビルは、でじこたちが有楽町で水銀燈と戦った時にミルフィーユ秘書が手違いで爆破してしまったのだ。

「ひよっとして、それで銀行は平田家を恨んだんじゃない？」

「まさか、ただ銀行を攻撃しても意味がないことは確かだ」

「天罰の先払いですかによ」

そのときでじこは邦俊さんが言っていたことを思い出した。

「この東京駅の丸の内口の一帯は別名「三菱村」と呼ばれていて三菱の本社があちらこちらにある」

これは三菱の創始者・岩崎弥太郎が明治維新後寂れていた練兵場跡地を買い取り社屋を立てたためだった。

「そこを探せば重工の本社くらい見つかるによ」

「ないよ」

重工の本社はすでに数年前にここから出て品川へ移転していた。

「品川かによ！ぷちこ、行くによ！」

でじこが飛び出した。

「ちよつとあんたどこへ行く気よ？」

「まさか品川の重工本社を真つ黒焦げにする気ゲマか？」

「ちがうによ！杉本さんのところに行つて相談するによ！」

うさだもゲマもそう聞いてでじこは成長したなとつぶやいた。

だが真紅だけが一人不安を感じていた。

でじこは宮殿内にある杉本侍従長の執務室に押しかけた。

「これはでじこちゃん、何か用かな？」

「杉本さん、教えて欲しいによ！平田先生と久弥さんが生涯をかけて学んだ陽明学とは何ですかによ？」

杉本侍従長はでじこも高度な学問を身につけようとしているのかと喜んで講義を始めた。

「陽明学の基本は、「知行合一」。すなわち自分の心を磨いた上で私利私欲にとらわれることなく、世の中全体のために良いと思うことはこれを自ら実行して世の中のために役立てる。これが陽明学の教えである」

「「知行合一」、でじこもやりますによ」

「ほほう、この言葉の意味が分かるのか。さすがは久弥が見込んだだけのことはある」

「とりあえず杉本さんの部下を一人お借りしますによ。陽明学を実行するために必要なんだによ」

そついうとでじこはぴよこの手を引いて部屋を出た。

「でじこちゃん、何をする気だ？」

杉本侍従長がふとわれに帰るとぴよこがいなくなっていた。ぴよこは王様お気に入り侍従だったので杉本侍従長はすぐさま王様に報告に走った。王様は宮殿内で典医となつた3人の診察を受けていた。「おっさん、まじめすぎて気苦労が多いから病気になるんだぜ」

「少佐！相手を考えろ！」

「よい、若いものの元氣は国を支える力となるのだ」

そこへ杉本侍従長が飛び込んできた。

「陛下！一大事でございます！」

「夢浮橋（杉本侍従長）、あなたが血相を変えて飛び込んできたと言うことは何かあったのですか？」

「花散里（はなさん）が遷標（てんひょう）に連れ去られました！」

「何ですと？夢浮橋（杉本侍従長）、何をやっていた！」

「申し訳ございません」

「すぐ行方を探し出せ！夢浮橋（杉本侍従長）、厳しい処分は逃れられぬものと覚悟しなさい！」

歯科医のカイは王様のけんまくに驚いた。

「あの落ち着いた王様にいったい何があったというのですか？」

「どうやらただことではなさそうだな」

内科医のクウは大慌てで道具を片付け始めた。

「少佐、何をあわてておるのだ？」

「二人とも今の会話聞いてなかったのかよ？」

「いったい何がおきたというのです？」

「もー、ぴよこが杉本のおっさんと一緒に仕事している時にデジキヤラットにさらわれたんだよ」

二人は驚いた。

「今の会話はその報告だったのですか・・・」

「おっさんが怒るはずだよ。デジキヤラットがなにやらかわかんねえぞ」

3人はあわてて道具を片付けてぴよこの搜索に向かった。

でじこはぴよこを連れて品川のビルの前に来ていた。

「ぶちこにぴよこ、これが邦俊さんを追放した重工だによ。手始めにここを目からビームでぶち壊すによ！久弥さんの陽明学、杉本さんの「知行合一」をやるによ！」

でじこたちは早速重工本社ビルの破壊にかかった。

程なくして杉本侍従長と医者3人も品川駅に到着したがすでに遅かった。

「ざまあみろだによ！」

「遅かったか・・・陛下に何と申し上げたらいいか・・・」

「杉本さん、しっかりしてください」

「少佐、杉本さんをすぐ宮廷病院へ・・・」

でじこたちは調子に乗って品川の全てのビルを破壊しつくしてしまった。

「夢浮橋（杉本侍従長）、目が覚めたか？」

「陛下・・・申し訳ございません・・・」

「あれだけの騒ぎが起きた以上、もはや私でもとめようが無い。須磨（道明）も蛸（久弥）もこうなると思っていたのだろう。だとすると、大変なことになりますよ」

「陛下、大変なこととは？」

「蛸（久弥）が書き残した「道の行く末」と言う本には驚くべきことが書いてありました。私は最初読んだだけでは夢物語だと思いましたが。でも今となつてはそのうちの3分の1ほどが実現しています」

「久弥ならある程度わかつていたとしてもおかしくありません」

「この本に書いてあることが全部実現したとしたら、大変なことになりますよ。日本という国が根からひっくり返ってしまいます」

「まさか、それは久弥も平田教授も望んでいないはずでは」

「そうですね。でも歴史というものは恐ろしい学問です。学べば学ばほど未来というものが見えてきます。この本の最後には恐ろしいことが書いてあります。それは・・・」

杉本侍従長は戦慄のあまり言葉を失ってしまった。

でじこは自分でぶっ壊した重工本社ビルの下で瓦礫の回収に精を出していた。

「お前らも手伝うによ」

でじこはみんなを集めて瓦礫を回収してはトラックに積み込んでいた。

「あんたこんなになくさんのトラックどこから集めてきたのよ」

「でじこ様の力ですよ」

「本当は久弥さんの資金の一部を使ってるにゆ」

ぶちこの言うとおり、このトラックはでじこがM i n tから受け取った11億4千万円から出したお金で貸切にしたものだった。

「ちよつと、久弥さんのお金でこんなことをして、ただじゃすまないわよ」

「でじこにしてはなかなかまともなお金の使い方ゲマね」

やがて夜もふけた頃、トラックはでじこの指揮で東名高速道路を西へ向かって走り出した。

「ふっふっふっ、今こそ久弥さんの予言をでじこ様が本当にしますによ・・・」

その日は月も無く真っ暗闇の夜だった。交通量も少なかった。そこに100台以上のトラックが集うさまはまさに圧巻だった。

「そういえば平田先生の最後の言葉を思い出すによ・・・」

でじこが平田先生と一緒に独裁者を倒してアキハバラへ帰る時、各地の歓迎で酒を飲み、疲れてしまった平田先生は愛知県内で寝込んでしまった。やがてでじこたちを乗せたバスが東名江田を通った時、平田先生が目覚めた。

「今どのあたりだ」

「まもなく東名川崎ICゲマ」

「そうか、東京料金所を通過したら教えてくれ」

バスが東京料金所を通過すると、平田先生はでじこを連れてバスの最前列にきた。ちょうど多摩川の手前で平田先生がつぶやいた。

「でじこちゃん、ここが私が一番好きな景色だよ」

そこは緩やかな下りになっていて、目の前に川と道路が広がっていた。

「この景色を見ると東京に帰ってきたという気がするなあ・・・」それが平田先生の最後の言葉となった。

バスが首都高速に入ると平田先生はへたりこんでしまい、アキハバラでの祝賀パーティには立っただけで一言もしゃべらずに壇上から去った。次の日の朝、ゲームズの3階で平田先生は静かに息を引き取った。死因は飲みすぎによる肝硬変だった。

「確か久弥さんに聞いたことあるによ・・・。」

「東名高速と国道1号線の盲点は由比だ。ここを塞がれば日本経済が止まる」

やがて、深夜にトラックは由比付近を通過した。でじこはここでトラックを止めると、ここがゴミ捨て場といって瓦礫をみんな捨てさせてトラックを東京へ返した。真っ暗なので誰も気付かなかった。翌日の朝、東名高速と国道1号線が封鎖されているのが確認された。でじこが瓦礫を捨てさせた場所は実は道路の真上だったのである。

瓦礫はバリケードとなって東西の交通をふさいだ。この地は東海道が走るにもかかわらず山が海岸まで迫っており、東海道線、国道1号線、東名高速がひしめいている。もし地震で壊れたら東西の交通は止まると危険を感じていた。でじこはついでに周りの山も目からビームで破壊した。これでちょっと目には土砂崩れのように見えた。当然、由比の町は騒然となった。町は瓦礫の山に覆われ、東西の交通が遮断されて大騒ぎになってしまったのだ。

69、愛知共和国独立

さて、でじこが豊橋で出会った杉浦社長はこの知らせに驚いた。杉浦社長の工場は主に関東方面へ工業製品を出荷していた。東名高速が寸断されると関東へ製品を出荷する術が無くなる。だが杉浦社長はこれは大変革のチャンスだととらえたのだ。

「みんな！愛知は独立国家として日本から独立するんだがね！」

社員たちは口々に社長の夢物語だと言って取り合わなかった。常務でさえ社長は氣い狂うたんとちゃうかと感じた。しかし杉浦社長は本氣だった。杉浦社長は自ら豊橋市長に面会した。

「杉浦さん、そりゃあんたの考えは無茶と違いますか？」

「愛知が東京の支配をうけとること自体間違つとるわ！関東は一都六県でやつと日本の中心だ言つとるけど、愛知は一県で日本のGDPの1割、世界のGDPの1%を作つとるんだって。金のあるやつが偉いというなら愛知が日本で一番偉いんだって。どうがんばつたつてしよせん商人はものづくりには勝てせえへん。最後に勝つのはものづくり、愛知だがね」

豊橋市長は根負けして「わかった」とだけいった。これが大げさに伝わり、続々と杉浦社長に同情論が集まった。小杉総理はじめ日本政府の関係者ははじめはどうせ冗談だろうとたかをくくっていた。

だがその間に杉浦同情派が愛知県内各地に集まり、気付いた時にはすでに豊田市を本部にして独立準備委員会まで出来上がっていた。

自衛隊を出動させようにも守山師団の幹部までが委員会に加わった上、東京から部隊を派遣しようにもでじこが起きた由比の交通遮断で動けなくなっていた。由比の瓦礫は11日目によやく一部の撤去が完了して国道1号が片側通行ができるようになった。その日に杉浦社長は豊田市で愛知共和国の独立を宣言した。この時点でも小杉総理はまともな状況判断ができていなかった。瓦礫の撤去が予想以上に遅れた上、東西の連絡もままならない。いまどきの日本で独立国家なんてそんな冗談をやる資金と度胸があるわけないと思っていた。だが杉浦社長は本氣だった。

「ええか、わしが作るのはファシズムや。ファシズム言うのは本来「束ねる」いうことだがね。世直しするには人を束ねんといかん」その日のうちに愛知県議会をそのまま国会にして愛知の独立を宣言し、杉浦社長はそのまま大統領に納まってしまった。

大統領になった杉浦社長は次の政策を打ち出した。

- ・税金は売上高に依じてかける「外形標準課税方式」を導入して赤字企業や大企業にも容赦なく税金をかける。また資本金5億円以上の企業には税金と同額の政治献金も義務付ける

- ・資本金1億円以下の企業に対しては税額を半分にすると共に補助金を増やす。また公的資金を活用した保護策を適用する

- ・企業に積極的に雇用を増やすよう義務付ける。企業には従業員の数を基本にして税金の額を減額する

- ・雇用の拡大につなげるよう、県内では面接による選考を原則として廃止する。また、年齢や学歴、経歴や人柄を採用の基準としてはならないことと不採用の場合は本人及び愛知政府への報告を義務付け、違反者は1億円以下の罰金

- ・選考方法は書類選考とくじ引きによる抽選を原則として就労機会を平等にする

- ・製造業の生産拠点の県外移管は原則として禁止する

しかし、愛知共和国では中部国際空港と港湾施設を除いて日本から入国する場合は原則としてパスポート・コントロールを行わないこととした。これは織田信長が関所を廃止して国内の交通を円滑にしたことに由来していた。商工業や経済にも重点が置かれた。杉浦大統領は商工業組合を廃止し取引所を拡充して誰でも自由に商業が営めるようにした。「楽市楽座」と呼ばれたこの政策で税収を増やす目的であったのである。しかしこの政策で経済は大いに潤うことになった。

70、シンガポールにて

一方、下関では尾崎守道と今村禅師がこの知らせに驚いた。

「いよいよ世の中をかえなければならぬか」

「今村禅師、何を考えているのですか？」

今村禅師は無言のまま尾崎邸を出た。そして今村禅師は岩国の米軍基地にたどりついた。

「何者だ！」

今村禅師は鉄丈で門を叩き壊し、さらに立ち入って基地内で大暴れをして100人以上の大男たちを相手にけんかを繰り広げた。

「袈裟ころも 有難そうに 見ゆれども これぞ在家の 他力本願」

「みな人は 欲を捨てよと すすめつつ 後で拾うは 寺の上人」

今村禅師が大暴れした一件は各方面に衝撃を与えた。

岩国の海兵隊が大暴れして下関の赤間神宮を襲ってその一部を焼いた。さらに海兵隊は今村探しを名目に唐戸の町を襲い、南風泊にまで迫った。やがて市場内に海兵隊が乱入すると、守道は一瞬間の中を考えがよぎった。

「もし父上（尾崎和夫）ならこんな時だったら真っ先に海兵隊と戦うだろう、だが相手は軍隊だ、むやみやたらと争って犠牲者を出したら父上はほめてくれるが平田先生には笑われるだけだ。どうすれば犠牲を少なくできるか・・・」

守道は市場の人たちを集めて末期の酒だといってワンカップを一人一個持たせて乾杯させた。そこへ海兵隊の面々がやってきた。血気にはやる海兵隊に守道はしきりにビールや日本酒を勧めた。もともと教育程度の低い軍隊だけに酒には目がないものも多かったのである。だが酒には当然肴がいるが守道はわざと用意しなかった。そのうち海兵隊員たちは市場の生簀で泳いでいる魚に目をつけた。これを肴にしてみんなで飲もうと言う腹つもりである。しかしここは名高い下関南風泊市場である。海兵隊員たちは何の知識もないまま名物のふぐをそのまま軍用ナイフでさばいて食べたのである。当然海兵隊員たちは次々と毒に当たって苦しみだした。これに驚いた海兵隊は無事な者をまとめて引き上げようとした。その時だった、守道は海兵隊員を襲ったのである。無事に岩国基地へ引き上げた海兵隊員は半分もいなかったと言う。

さて翌朝、シンガポールでは魚市場でこんな会話が交わされていた。
「邦俊さん」

「おお、みけちゃん。今日も魚は釣れたかね？」

「大漁みや！」

「おいしいのはあったかね？」

「マグロがあつたみや」

「これはインドマグロだね、トロは少ないが赤身がうまい魚だ。久しぶりに刺身でも作るか」

「賛成みや！」

邦俊はシンガポールに流されてからというものは悠々自適の暮らしだった。活発でつり師のみけが朝早くに出かけて釣った魚を魚市場で売りさばき、いい魚があれば魚市場から他の魚の売却代金と一緒に持ち帰る、そこに邦俊がみけを迎えに来るのが毎朝の日課になっていた。邦俊がみけを迎えに行くのにはもう一つのわけがあった。それは新聞を買いに行くことだった。シンガポールはもちろん日本以外の国には新聞の戸別配達制度そのものが存在しないので新聞を買いに行かなくてはならない。邦俊は「ストレード・タイムス」や「アジアン・ウォールストリート・ジャーナル」などを買っていた。戸別配達がないので新聞は日本よりはるかに安くドルもあれば高級紙が買えてお釣りも来たくらいだった。邦俊がみけと一緒に自宅へ戻り、朝食用の魚をさばいて刺身にしたところで朝に弱いミルフイーユ秘書が起きてくる。

「おはようございます・・・」

「ミルフイーユさん、その朝に弱いのは何とかならんかね」

「そんな事言われたって仕方ないですよ・・・」

寝巻きのまま寝ぼけ眼だったミルフイーユ秘書だったが、邦俊が買ってきた「ストレード・タイムス」を読んで一瞬にして目が覚めたようだった。

「邦俊さん、大変ですよ！」

「はあ？まだ寝ぼけているのか？ごはんにするぞ！」

「ごはんどころじゃありません、この新聞見てください！」

邦俊は新聞どころではないと朝食の支度を始めたが、みけが新聞記

事を見て驚いた。

「これ、お魚博士（尾崎和夫）さんの息子さんみゃ？」

「何だつて？」

邦俊はあわてて新聞を取り、新聞記事を見た。

「確かにこれは守道さんだが、どうしてシンガポールの新聞に……まさか守道さんのことだから短気を起こしたんじゃないか？」

「なんて書いてあるみゃ？」

「どうやら守道さんが海兵隊を相手に大暴れしたらしい、困ったことになった……」

邦俊は大慌てでNHKラジオジャパンを聞こうとした。だがNHKは種種の問題を抱えていて放送どころではなかったのである。邦俊は朝食もそこそこに済ませて日本大使館や三菱重工シンガポール支店を回ったが、どちらも大混乱で収拾がつかない有様だった。邦俊はこれは日本で大変なことが起きていると感じたのだ。最後に邦俊はシンガポール放送協会（SBC）を訪れた。そこで邦俊はでじこによる三菱重工本社ビル爆破や由比の海岸への瓦礫の投棄に始まる東西交通網の寸断、愛知共和国の独立宣言、今村禅師の事件から南風泊の事件まで全てを聞きだしてしまった。邦俊はすぐ自宅に戻りみけとミルフィーユ秘書にこのことを伝えた。

「ここに至っては困難なことではあるが、みけちゃんの船で日本に戻ることにした。これ以上でじこちゃんや守道さんたちに勝手をやらせることはじいさん（道明）や伯父上（久弥）が許さないだろう」

「邦俊さん、三菱重工はどうするんですか」

「事務所に行ったところでもはややる仕事などない。明日にでも辞表を出す」

翌日、邦俊は事務所に辞表を提出し、直ちに帰国の準備に入った。そのうわさはたちまちシンガポール中に伝わった。中でも魚市場ではそのうわさでもちきりだった。

「おい、いつも市場に来ている女の子はミスター・平田の助手だったんだってさ」

「しかもミスター平田自身も魚市場に来ていたとはね・・・」

世界的な歴史学者だった平田道明と日本の有力政治家だった平田久弥の名はシンガポールにも届いていたのだ。たちまち取材が殺到した。だが邦俊は自分はミルフィーユ秘書とみけの3人でシンガポールに来たから帰るときも3人で帰る。航海中の食料だけ用意してくればそれでいいといって3人で再び船に乗り込んだ。

「私の祖父、平田道明は学問を究めた、伯父・久弥は都知事まで上り詰めた。しかし二人とも金は稼いだがぜいたくな生活をする事にはなかった。道明の孫の私とてその考えに変わりはない」

だが時代は邦俊の船が到着するのを待つてはくれなかった。米軍基地に対する暴動は激しくなるばかりで、ついに米軍は日本人デモ隊に対して発砲を始めた。

ホーチミン市でこれを聞いた邦俊はあ然とした。

「バカなことするもんだ。こんな時に殉教者を出せば火に油を注ぐだけだと言うのが分からのかなあ・・・。少なくとも話し合いや規模の縮小は考えるべきだった。警察や軍隊は国民の信頼を基本にしてこそ成り立つ組織だと言うことを忘れてはいかん。駐留軍は派遣先の人々の信頼と人気が必要だ。派遣先の国民から搾取するならその時点で侵略軍となり攻撃されても文句はいえん」

邦俊はやや絶望した表情で船を降りて町へ出た。すると、見覚えがある顔があった。

「杉本、杉本じゃないか！」

「あつ、平田の・・・邦俊！なんでここに！」

邦俊が声をかけたのは杉本侍従長の長男でラプソドス団副団長の杉本正也だった。正也も邦俊に劣らず語り口がうまく、アジア各地を回りながら紙芝居を上演していた。

「そうか、それでベトナムへ来たのか。確かに日本もひどくなったもんだ。親父殿は今頃はらわたが煮えくり返っているだろうよ」

「そうだとも、幸いにして船がある。正也、日本へ帰ろう！」

正也は小さくうなずいたが、不安そうな顔をのぞかせた。

「邦俊、お前の気持ちは分かるが、俺とお前と女の子が2人だけで日本に戻ってどうする気だ？まさか親父殿に頼んで陛下から命令を出してもらう気じゃないだろうな？もしそれを考えているなら俺はここに残る。今の日本が陛下の命令だけで治まるか！」

「その気ならシンガポールに着いたその日のうちに国際電話かけて辞表たたきつけて飛行機で戻っているよ。なあ正也、俺とお前はラプソドス団の団長と副団長だ。おれたちにしかできない方法があるはずなんだ。」

「さすがは平田一族だぜ。やりもしないであきらめるということが久弥が最も嫌うことだった。親父殿がよく言っていた」

翌日、ホーチミン市の公園に不思議な太鼓を持った二人が現れた。三つ又に分かれたバチと太鼓を持って「大丈夫だあ」と叫びながら町を回るのである。その様はいつしか多くの人の注目を浴び、ついにはマスコミが取材するようになっていった。邦俊たちはダナンの港から再び船に乗り、マニラからケソンシティを回り、基隆港に着いてまでこの太鼓をたたいては各地を回っていた。

71、町にやってきたキャトルレーヴ

さてでじこはそんな邦俊の有様をテレビで見てあきれ果ててしまった。

「とうとう邦俊さんやミルフィーユさんまで狂ってしまったによ。

久弥さんがこれを見たら何と言いますかによ」

「でじこさんならどうなさるんですの？」

「みんなまとめて目からビームによ！」

「お父様が生きていらしたら大笑いしていたでしょうね」

「当然によ！笑うだけじゃすまないによ」

「天国ではおじいさまと一緒に大笑いして「さすが私のおいだ、もつとやれ」とでも言ってますわよ」

でじこはその言葉に耳を疑った。

「でじこさん、まだ分かりませんか？ 邦俊さんはただ笑われるためだけにあんなことしているわけではないことを・・・」

すると、そばにいた杉本侍従長も顔色が変わった。

「まさか・・・。邦俊君と正也はとんでもないことを考えているんじゃないだろうな・・・」

「お察しの通りかもしれませんが」

杉本侍従長はその場にしゃがみこみ、ぴよこが介抱に当たった。

「Mintおねえちゃん、さっきのテレビの映像はこの町かぴよ？」

「ベトナムのホーチミン市ですわ」

「飛行機で行くことはできないのかぴよ？」

「行つてどうする気ですか？ 邦俊さんを止める気ですか？」

ぴよこは小さくうなづいた。

「行くことは難しいことはありませんけど、やめたほうがよろしくてよ。杉本さんは止めることはしないほうがいいと考えていますわ。なぜならこれが平田道明の意思であり、予想した世の中なのですから」

「行くなら旅行費用はでじこ様が出すによ」

「でじこさん、私が渡したお金はそうむやみに使うものではありませんわ！」

「大丈夫だによ、23億円もあるんだによ」

この言葉にMintは驚いた。

「なんですつて？ 私が渡したのは11億4千万円のはずですわ！」

「どう使うかでじこも困っているんだによ」

でじこの言葉に耳を疑ったMintはでじこに残高を見せてもらった。するとMintがでじこに渡したはずのファンドはなんと残高が25億円近くにまで達していた。

「どういうことですか？」

「でじこの財務担当がやってくれたによ」

「いつの間に・・・」

すると一人の女性が入ってきた。タイトスカートにスーツで身を包みいかにもキャリア風のできる女性風の人だった。

「でじこさん、お待ちせしました」

「どれだけ増やしてくれるによ？」

「はい・・・」

その瞬間、M i n tとその女性は一瞬戦慄した空気に包まれた。

「文子、文子じゃない・・・」

「あなただったのですか・・・」

「文子、久しぶりね、お母さんよ」

この言葉にでじこたちは絶句した。

女性の名前は長江由美子、投資ファンド「エンジェル・ウイング」の代表で、でじこの資産を管理していた。

「あなたをお母様と呼ぶ義理はありませんわ！今頃になってのこの現れて図々しいですわ」

「そんな冷たい言葉言わなくてもいいじゃない」

「由美子さんはM i n tさんの母親だったのかによ？」

「そうよ、こんなにかわいく育つてうれしいわ」

「なれなれしくしないでくださいまし！」

「M i n tさん、由美子さんをきらうのは訳があるのかによ？」

「ええ、確かにあの人は私を産んだ人ですわ・・・」

由美子がかつて久弥の愛人だった。だが仕事に強い興味を示す由美子との結婚を東大教授だった道明が許すはずもなく、また政治家を目指していた久弥には邪魔でしかなかった。由美子のほうもキャリアを目指していたことから家庭は邪魔な存在にしか思えず二人は入籍しないで暮らすようになる。もっともアパートの一室で互いに声をかけることもなく存在すら気につけない有様だった。由美子はM i n tを産んだものの育児には興味を示さず仕事ばかりに熱中して家には帰ってこない日々が続いたため、久弥はM i n tを認知し育児を始めた。そのためM i n tは平田の姓を名乗って生きてきたのだ。これではM i n tが由美子を許せるはずがない。

「でじこの大好きな泥沼ドラマにゆ」

「面白いですよ、同人誌のネタになりそうですよ」

「やめてください！」

「久弥さんとキャリアお姉さま、平田一族には頭は空っぽだが美人が多いによ」特に由美子さんは飛び切りの美人だったによ」

「だれ？その由美子さんって、あかりとどっちが美人なの？」

「そりゃ由美子さんに決まっているによ！ん、によよ？」

後ろを振り向いたでじこは驚いた。

「美香さんによ！」

「もう一人の美人が現れたにゆ」

「まさかあの女が現れたとはね・・・」

「美香さんも恨みがあるのかによ？」

「ええ、あかりと宝塚で苦勞していた時、伯父上（道明）が私たちを助けようと仕送りを送ろうとしていた時にお金を送ることに反対したの。自分で生活できなきゃ生きていく資格無いって」

「めちゃくちゃな女だにゆ」

美香が東京に戻ってきたのは新規開店する「キャトルレーヴ・アキハバラ店」の開店記念イベントのためだった。

「キャトルレーヴ」とは宝塚歌劇団公式ショップで東京には日比谷と有楽町にあったが、なぜか今度アキハバラにできることになった。それは一時アキハバラに巻き起こった宝塚ブームの成功に加え、美香が大衆層へのファン獲得に積極的だったことだった。これはあくまでも庶民の歴史を追及してきた伯父・道明の願いでもあった。事実、宝塚歌劇団はその創設者・小林一三の精神により庶民の娯楽として出発した劇団であった。当初は日本昔話などを上演していた。現在のように洋風で高級なオペラを上演するようになったのは昭和に入ってからのことである。セレブで華やかなイメージとはおかけ離れた劇団だったのである。劇団の経営が苦しくなったのは人氣をいいことにあぐらをかいて上流階級ばかりを相手にしてきたことが原因だった。しかし上流階級相手ではその数が知れており人氣

拡大にはつながらない。小林一三や平田道明が庶民の娯楽を目指したのは庶民の数が上流階級より圧倒的に多いからだった。

でじこは美香の衣装を見るなり驚いた。

「美香さん、でじこと同じメイド服だによ」

「今度の舞台の主役なのよ」

キャトルレーヴ・アキハバラ店は秋葉原駅の北東側に新しくできた「東宝アキハバビルディング」の2階にあり、1階から5階までがショップ、6階から8階まではレストラン街、9階以上が「第二東京宝塚劇場」になっていた。この新しい劇場のこけら落とし公演が美香が所属する花組公演「プリティ・プリンセス・デジキャラット」だった。もちろん主役のでじこ役は美香である。キャトルレーヴ・アキハバラ店には宝塚歌劇団の創設者・小林一三の写真とアキハバラではすでに神様とされていた道明の写真が飾られた。アキハバラでは久弥の業績を評価する声が多かったが、店に久弥の写真が飾られることはなかった。久弥は生前自分が神格化されることを恐れていたため自分の死後も写真や肖像画を飾ることを禁じた。平田親子が愛した「万世」にも「久弥の席」があったが、久弥の写真は飾られていなかった。ただ久弥がでじこを溺愛していたため、ゲーマーズの2階の一角には平田親子の写真が飾られ、平田顕彰館となっていた。ここには六甲山にある「六甲平田神社」の分祀所でもあった。そのため国の平安を願う人たちの崇敬を集めていた。でじこは分祀の意味をM i n tに聞いた。

「それは例えるなら六甲山からおじいさまの魂の火を分けていただけのようなものですわ」

「と、いうことは六甲山から平田先生の魂を分けてデジキャラット星に持っていけば平田先生を拝むことができるのですかによ？」

「はい、もしそうであるならおじいさまの魂は六甲山とこのアキハバラ、そしてデジキャラット星の3箇所同時に存在することになりますわ。でじこさんがそれを望むのであれば分祀を行ってさしあげますわ」

「平田先生と久弥さんにもデジキャラット星を見せたかったによ・・
」

だが、でじこはキャトルレーヴのアキハバラ進出には批判的だった。もともと宝塚歌劇には批判的だったでじこはアキハバラに宝塚を持ち込むこと自体反対だったのである。それを口に出さないのは美香への配慮だった。アキハバラでの美香の公演もでじこは行きたがっていたが、ぷちことMintに強く止められた。Mintもキャトルレーヴはアキハバラに存在してはならないと考えていた。そのため開店場所を池袋にするよう強く働きかけていたが、結局は美香の主張を劇団が受け入れる形になってしまった。もともと地方公演が多い美香とMintはあまり接触する機会はなかったのである。また自らの実力で売り出したいMintにとっては身内に宝塚の女優がいることは大きなダメージになる。

「Mintさん美香さんとは仲が悪そうだよ」

「当然ですわ、あんな石頭！」

「だいたいMintさんは要領悪すぎだよ」

「まあ、お父様も不器用な人でしたから・・」

「でも久弥さんは人と仲良くするのは得意だったによ」

「なぜか分かるかにゆ？」

「さあ？」

「久弥さんは名古屋の大須の町が大好きだったによ」

「ああ、あの町と何か関わりありますか？」

「大須ではいろんな人が共存してるによ、それはお互いが相手の存在価値を認めて互いに助け合うことによ。このアキハバラでも同じによ。Mintさんの欠点は実力があるから自分の力だけで何でもやろうとするのが欠点によ。でじこだったら人の力を利用するだけ利用してはいあがる方を選ぶによ」

「でじこはさすがにこいにゆ」

72、南十字星が教えてくれたこと

数日後にM i n t はでじこを尋ねた。

「でじこさん、私、高速道路のポスターのお仕事いただきましたの」
「そうですかによ」

「でじこさんも一緒にいかがかしら」

「ポスターなんてでじこ様のからじゃないによ」

「このポスターはただのポスターではありませんの。アジア中の各都市に張り出されるんですの」

生前の平田親子が心血を注いだ事業、それが「アジアハイウェイ」だった。トルコから東に延びる高速道路、東の終点は決まっていなかったが、久弥が都知事の時代に終点が東京用賀にある東名高速道路東京インターチェンジに決まった。アジアハイウェイ構想に積極的だったのが道明であつたことから、アジアハイウェイ機構と高速道路会社は道明の精神を受け継ぐものとして二人を起用したのだつた。歴史学者であつた道明は世界中の交通網を活発にして物流を盛んにすれば日本は栄えると信じていた。事実織田信長が当時常識とされていた関所と通行税を廃止したことにより領内の通行が盛んになり商工業が盛んになった例がある。だが、難問もあつた。途中に独裁者の国があつたために工事はそこだけストップしていたのである。後にでじこたちが道明の手引きでピョンヤンに侵入してついに独裁政權を倒してしまったのである。そのためアジアハイウェイが完成したのだ。でじこM i n t はイベントで用賀に0キロポストを立てたりした。

その頃、駐日フランス大使、ジャック・リリは休暇を利用してピョンヤンを訪問していた。この町の中心部に高い塔がある。かつて思想塔と呼ばれていたが、でじこが進入した時にゲマがこの塔の頂上に尾崎先生の南十字星の旗を立てた。すると塔から光が差した。以来この塔には南十字星の旗を手に持ったでじこの像が立っているのである。だが、リリ大使は一種の不安を覚えた。

「でじこちゃんが独裁者のようになつたらこわいな・・・。」

かつて、独裁者は自分をたたえる音楽を作り、何万人もの人を集めては「マスゲーム」という集団人文字や演技を繰り返していた。独裁者の政権が崩壊した後は独裁者の銅像はでじこの銅像に作り変えられ、レリーフもでじこに変わったただけでそのまま存続していた。マスゲームも時折でじこの肖像が掲げられて行われていた。道端にある絵もでじこへの皮肉かいろいろな絵が描かれていた。「民族の運命 でじこ同志」と書かれた文章の下にでじこが民衆を率いて戦う姿や、「あなたがいなければ祖国もない」と書かれた文章に火花をバツクにしたでじこの銅像の絵などもはや皮肉一杯だった。

「これにでじこちゃんが共鳴しなければいいのだが・・・」
リリ大使の予感当たっていた。

宝塚歌劇団公演「プリティ・プリンセス・デジキャラット」は確かにでじこや久弥さんを主人公にした物語だったが、女性だけの劇団の宿命が事実とはかなり異なる物語を上演していた。これにMintが火のごとく怒り、ぷちこは途中で退席してしまったのである。でじこも物語の出来には満足していなかった。その夜、ぷちことMintは夜通し話し合った。

「でじこさん、朝ですわよ」

「朝ですかによ・・・。Mintさんなんだか疲れていそうですよ」

「当然ですわ、でじこさんを女優にするために画策しているのですから」

「それでなんかいい話あるかによ」

「ええ、でじこさんを女優デビューさせる話がまりましたわ」

「なんですとによ？」

でじこがMintに連れて行かれたのは小さな公園だった。

「ここでビデオの撮影ですわよ」

でじこは愕然とした。

「いいですか、でじこさん。おじいさまだって最初から歴史学者だったわけではありませんわ。小さなことから一步步努力して積み

重ねた結果が東大教授・平田道明なのですわ。お父様は「でじこちやんは他力本願というのが嫌いな子でね、自分で実行したり努力しているところを見せないと納得しないよ」と言っていました。いきなり銀幕の大女優など誰にもなることはできませんわ」

「そうだによ、で、何と言う物語によ」

台本は昨夜M i n tが急いで書き下ろしたものである。「平田道明の南十字星」と「平田久弥の星のお話」の2本だった。いずれも20分ほどの物語だった。

「ところでこれは映画館で上映するには短すぎるによ。テレビでやるのかによ？」

「いいえ、プラネタリウムで上映します」

以前放火で全焼した平田図書館は再建が進んでいたが、その一角にあった映写室を新たにプラネタリウムにしたのだった。数年前まで渋谷にあった「五島プラネタリウム」の機材をプラネタリウム再開を夢見て保存していたグループがあった。

「五島プラネタリウム」は都内屈指の人気を誇るプラネタリウムで閉館の報を聞いて道明が何とかして残せないかと訴えたほどである。子供たちの学習と夢を紡ぐ場所を大人の都合で奪ってはならない。東大教授という教育者の職にあった道明の言葉である。常連客たちはこの夢を紡ぐためにプラネタリウムの機材を保存管理するグループを結成した。後に久弥が都知事になった際に立川の昭和記念公園に隣接した土地に機材を据え付けてプラネタリウムを再建しようとしたが、久弥の死でそれも頓挫してしまった。「五島プラネタリウム」が渋谷にあった関係で常連客の多くが東京南部と神奈川に集中していて立川には行きにくいいためグループが計画に積極的でなかったことも災いした。

そこでM i n tがこのグループを説得して機材を町田に運んでプラネタリウムを完成させた。町田なら「五島プラネタリウム」の常連客の多くが難なく来られるという利点があり、なにより平田親子の地元であるということでグループは一転協力姿勢に転じた。

そのこけらおとしとして上映する番組であつた。

「平田道明の南十字星」は南十字星にまつわる様々な伝説とでじこが道明と出会って独裁者を倒すまでのストーリーだった。「平田久弥の星のお話」はでじこと久弥の物語を交えながら久弥が目指した「陽明学の世の中」を解説するものだった。いずれもM i n t のナレーションと曲が入った。遠い星から来たでじこに星の解説はまり役だった。

「・・・こうして大阪・上本町に輝く南十字星の伝説は、およそ半世紀を経て道明の語るところとなって人々の心を捉えていきます。しかし近年、星の光が上本町の空の上に輝くことがなくなりました。時を同じくして地上からも星が消えていったのです。上本町のある大阪ではここ数年町工場が次々と消えていきました。夢を忘れた人々は上本町から去り、株などものづくり以外の方法で労せずお金儲けをしようとしたのです。けれどもそれは一時の夢でしかないことは分かつていたことでした。けれども上本町にはまだ夢を捨てていない人たちはたくさんいます。平田道明は弟子であるでじこに夢ある人を束ねることを命じたのです。自分が亡くなった後の遠い未来、夢ある人は必ず立ち上がって日本を立て直してくれるはず。これが道明が日本史を研究した結論でした。しかしでじこはまだ10歳、そこで道明は星に希望を託すように「星の伝説」として南十字星の伝説を語って聞かせていたのです・・・」

M i n t のナレーションつきのプラネタリウムの番組は徐々に人気が出てきた。時には番組終了後にM i n t がプラネタリウムの前で歌うこともあった。

ところが美香はこれを苦々しく思っていた。自分たちが演じているストーリーとははるかに違うからである。でじこにしてみればどちらもどっちだった。

73、でじこのお使い

でじこの周りの人間がみんな勝手に生きていたためにすっかりでじ

こは今の世の中に嫌気が差してのほほんとしていた。

「ぷちこ、デジキャラット星に帰るかによ」

「でも燃料がないのどうやって帰るのかにゆ？」

「愛知の飛行機工場を襲えばすぐによ」

「おまえばかにゆ」

愛知に行こうにもでじこが由比で瓦礫の山を築いて塞いでしまいその間に愛知は独立宣言してしまいすっかり近寄れない有様だった。

「ここは私の出番ですわね」

「ちとせさん・・・」

牧村ちとせ、「ミルフィュー秘書」の妹で空自のパイロットであった。

「でじこさん、これを預かってきました」

ちとせは紫色の包みを開くと手紙を取り出した。

「これなんだによ？」

包みには王様の命令書と杉本侍従長からの手紙があった。内容はでじこに愛知共和国の杉浦大統領を説得してこいと王様から命令が下ったと言う内容だった。

「でじこさん、私と一緒に名古屋へ行きましょう！」

翌日、中部国際空港は騒然となった。いきなり小型機が現れて滑走路に強行着陸したからだだった。

「さつさと杉浦さんに会わせるによ！」

だが係官は子供のいうことと言って相手にしなかった。怒ったでじこは目からビームを発射した。係官たちは恐れをなして大慌てで空港長の元へと向かった。

「なに？、子供が杉浦さんに会わせるだど？」

「はい、武器を持って空港内に現れました」

「それで被害は？」

「係官が数名負傷・・・」

「よし！とりあえず機動隊を出動させる！」

「空港長、いちおう杉浦さんにも連絡入れといったほうが・・・」

「そつだな、すぐ連絡を入れろ」

名古屋市東区、ここに杉浦大統領の官邸があった。

「杉浦さん、えらいこつちゃ！」

「何かあつたんか？」

「中部国際空港にいきなり武器を持った女の子が来て杉浦さんに会わせる言つとりますがね」

「は？武器を持った女の子？」

「係官が数名やられとりますがね・・・」

「それでどうしたん？」

「一応機動隊が周りを取り囲んでいますわ。ほんでもどうにかせんとあかんのじゃないですか？」

「わけわからんなあ」

「そこで、空港長がメールで送ってきたのがこの写真だで」

写真を見たとなん、杉浦大統領の顔色が変わった。

「おい、武器を持つとるというのはこの子やないのか？」

「詳しくは分からんけど、たぶんそうじゃないか・・・」

「たーけ！すぐ空港長に電話したれ！」

杉浦大統領はすぐ空港長を呼び出した。

「おい、お前ら機動隊で女の子を取りかこんどるのじゃないか？」

「はい、何しろ手の出しようがないので・・・」

「たーけ！わしやお前から送ってもらった写真見たぞ。白い服着とんのはただの女の子とちゃう。どえらい子じゃ！」

「え？」

「その子はな、シヨコラ・デジキャラットと言うて東大の平田先生の最後にして最高のお弟子さんやないか！」

「なんですつて？あの東大教授の弟子？」

「そや、それもただの弟子とちゃう。平田久弥の都知事当選の際に選挙参謀としても腕を振るつた手柄で久弥から平田流歴史学の後継者と定められた子や。あんたらがかかって勝てる相手とは違つ。わ

しもよ、すぐまわし（用意）して空港に行くでよ、さつさと囲みを解いて子供らをラウンジに通してお茶でも出して待つとれいうとけ！」

その頃、セントレアの船着場に小さな船が着岸した。

「やつと着いたか・・・」

「ここはどこみゃ？」

「愛知県常滑市、セントレアだ」

「え？空港なんですか？ でもここは船着場ですよ」

「三重県に向かうフェリーが発着するところだよ」

「とにかく本土に帰れたわけだな」

シンガポールを旅立った邦俊、正也、ミルフィーユ秘書、みけの4人はやつと日本に帰れたのだ。4人は船着場から通路を抜けて中部国際空港駅のコncourseに来了。そして2階の到着ロビーに来了ところで、機動隊とでじこが対峙する場面に遭遇したのである。邦俊は機動隊の後ろから大声で叫んだ。

「でじこちゃん」

「君！何かね！民間人は後ろへ下がっていなさい」

でじこも「邦俊さんによ！」とさげんだ。

「何？君はあの子の知り合いかね？」

「ええ、私は平田邦俊といいます。こちらはミルフィー・・・いえ、牧村雪絵といってあの長い髪の女の子の姉です」

「あつ、ちとせちゃんです」

「するとあの3人の親戚か」

「説得に当たってみます」

「空港長、どうしますか？」

「やらせてみる」

「でじこちゃん、いったいどうしたというのだ？」

でじこは杉本侍従長から預かった手紙を見せた。

「なに、あんたは親父殿から頼まれたのか？」

「親父殿？」

「これは私の親友の杉本正也」

「杉本さんの息子さんですかによ」

邦俊は手紙を持って空港長に突きつけた。

「空港長、これは杉浦大統領への親書です、この子供たちは正式な
外交使節ですよ」

「まさか・・・」

「空港長、先ほど杉浦大統領に電話したところどうやらお知り合い
だったらしくて血相変えてここへ向かうからラウンジで待たせとけ
と」

「すぐ囲みを解いてラウンジにご案内しろ」

でじこたちの囲みが解かれて機動隊が撤収した。そのときだった。
いきなり空港全体が大地震に襲われた。

「な、なんだ？」

しかし揺れは短時間で収まった

「なんですか」

しかし邦俊は変だといった。

「ちょっと待て、これは地震の揺れとは違うぞ」

「そういえばそうだな、いったい何が・・・」

「とにかく機動隊の諸君は各持ち場を一斉に点検し、けが人がいた
ら速やかに運び出して治療に当たること」

邦俊は機動隊からメガホンを借りて乗客の誘導に当たった。

「乗客の皆様、先の方から順番にあわてず落ち着いてバスにご乗車
ください。なお、現在名鉄常滑線は不通となっております。代行バ
スがございますので順番にご乗車ください・・・」

そのうち声がかれてきたのでメガホンを他の人に代わってもらい邦
俊は少し休むことにした。この時なぜか邦俊はスターバックスへ行
った。

「おい、おまえがコーヒーを飲むのかよ？」

「なんか紅茶を飲む気分にならなくて」

そこへでじことぶちこがやってきた。

「正也さん、世の無常って何だによ？」

「なかなか難しいことを聞くな。親父殿が教えたのか。この世の中はな、「諸行無常」と申してな、この世にある全てのものは同じ形をそのままとどめることは決してありえない。全てのものが時と共に移ろい変わっていく。生あるものは必ず死に、形あるものは必ず打ち碎かれる。たとえ地球や太陽といえどもその運命を免れることはできない」

「ではこれも諸行無常ですかによ？」

でじこは二人の前に小型テレビを差し出した。画面を見るなり二人は固まってしまった。テレビでは韓国軍が福岡や北九州市を空爆している様子が写っていた。

正也は邦俊を締め上げた。

「おまえがコーヒー飲もうというからこんなことになったんだ！」

「落ち着け！ いったい何がなんだか訳が分からん」

そこへちとせがやってきた。

「邦俊さん、先ほどの地震の原因が分かりました」

「なんだと？」

「先ほど臨時ニュースが流れました。先ほどの地震は済州島で核実験を行ったことに伴うものという報道が・・・」

「韓国では戦争でもやる気か？」

次の瞬間、正也の顔色が変わった。

「おい邦俊、これは小倉城ではないか？」

「あつ！ 本当だ！ じいさん（道明）が愛した城が、松本清張記念館が・・・」

「平田先生の町、門司港レトロもやられたんじゃないか？」

だが門司港レトロと門司の町は無事だった。韓国軍は門司と下関を上陸地点として考えていたからだ。これは門司が良港だったことと日本と韓国との往来はジェット機が出現するまでは下関の港から釜山へ向けた船が主役となっていたためである。

空爆が一段落したら韓国軍は下関と門司から上陸して日本に侵攻しようとして上陸作戦を開始したのである。しかしこれが韓国軍にとって誤算となってしまうた。門司は道明の出生地である。そのため道明を慕う地元住民も多かった。彼らは道明の写真をプラカードに掲げながらデモ行進を行ったのである。デモ隊は数万人に膨れ上がり韓国軍と衝突した。事情を知った韓国軍は道明の邸宅探しを始めた。だが生まれてまもなく門司を離れた道明が門司に残した足跡はほとんどなかった。それでも道明を慕う人々によって生家が記念館になるうとしたが、当の道明はほとんど故郷に貢献していないのに記念館とはおこがましいと平田の名を冠することを許さなかったため生家は「門司切手博物館」として道明のコレクションしていた切手を展示する施設となった。すでに生家も平田家の手を離れていたのが幸いして道明は寄贈者の一人として名を刻むにとどまった。かつて道明がでじこを連れて門司へ来た時、この切手博物館を訪れたことがあった。そこには道明の写真の隣に大きく引き伸ばされた瀟洒な蝶ネクタイをした人物の肖像画が目立つように飾られていた。多くのことをでじこに教えてきた道明だったが、この人物についてだけは生前にでじこに語ることはなかった。でじこがこの人物の名を知るのは道明の没後に久弥が町田の平田邸にでじこたちを招いた時である。同じ肖像画が平田邸にもあったため、でじこは久弥にこの人物の名を尋ねた。この人物の名は「重光 葵」（しげみつ まもる）といった。戦前、外交官として下関の港に帰国した際、岸壁で遊んでいた道明に声をかけて知り合ったという。重光は後に外務大臣兼副総理にまで上り詰めた人物である。久弥の話では生前、道明は重光を大変尊敬しておりそのために部屋に肖像画を飾っていたのだが、生前の重光が道明に「あまり私を尊敬していることを公にしないよう」といつていたことから道明も多くを語ることはなかったのである。久弥ですら重光の来歴は王様から聞かされたくらいだった。「重光は自らの名が蔑まれる事が日本の繁栄につながると考えていた男だった」

王様は久弥にそう語った。久弥が生まれた時も道明は最初は「葵」と名前をつけるつもりだったが、これを知った重光は道明の家へ出産祝いと称して訪れ、生まれた子を抱き上げて自ら「久弥」と命名した。これでは道明も何もいえなかった。シルクハットに義足と蝶ネクタイをした重光は久弥を抱き上げるところといったという。

「この子は学者にはならない。この子は必ず政治家になる」

久弥が生まれた翌年の正月に重光は心臓発作で急逝するのだが、最後の言葉は「もう思い残すことはない」だった。重光は久弥に夢を託したのだろう。道明もそれを分かっていたから久弥には自由にさせた。久弥が本当に政治家になると思っただけには後にも先にも重光葵だけだった。久弥が都議会議員になった時、Mintの前で道明は空を見上げたという。重光さんの予言は的中したけど久弥はこんなものでは終わらん、そうつぶやいたという。まさかその後で都知事になるとはだれが考えただろうか？

重光の名は韓国でも知られており、韓国軍兵士が切手博物館に侵入した際、重光の大きな肖像画があるのをみて驚愕したという。展示物も道明のコレクションだったカナダの「第2次世界大戦シリーズ」だったことも幸いした。これは1939年からの戦争を1年に4枚の切手で表現したシリーズであるが、偶然にも展示されていたのは1944年の「D・DAY」（ノルマンディー上陸作戦）と1945年の「ベルリン陥落」であつたため、韓国軍の襲撃を免れた。

一方、海の向こうの下関にはあの男がいた。尾崎守道である。守道は米軍兵士にふぐを食わせた一件で一度は逮捕された。しかし武器を持った兵士がいきなり市場にやってきてみんなが騒然としてしまい酒を与えて何とかなだめようとしたことや自分が止めたのに兵士たちが市場にあるふぐを何の注意もしないまま彼らが食べてしまったなどと主張して無罪判決を受けたのである。一方、今村禅師も出獄していた。あまりの暴れん坊ぶりに米軍も手を焼いてついに釈放となつたのである。だが韓国軍は強くあつという間に唐戸の町は炎

に包まれてしまった。

「おのれ、このままでは終わらんぞ・・・」

74、大江爆撃

騒ぎがひと段落すると、でじこたちは邦俊の船に乗って北へ向かった。

目指すは名古屋市大江の飛行機工場。ここで杉浦大統領が待っていた。

でじこが来たという知らせを受けた杉浦大統領は直ちに中部国際空港へ向かったが、途中で件の地震のため列車が脱線してしまった。不幸中の幸いだったのはそれが大江駅構内だったことだった。大江駅は広い地平駅だったため脱線しても人命に損傷はなかった。しかしこれでは先へ進めないため杉浦大統領は大江ででじこを待つことにした。

でじこたちの乗った船が東名古屋港の波止場に着くと、数百人の人が歓迎した。一斉に「でじこコール」が巻き起こり、その声は数千人に達した。でじこはその声を聞きながら大江の飛行機工場に入った。程なくして杉浦大統領が出迎えた。

「よう来なさった・・・」

「杉浦さん、この子が？」

「そうじゃ、この子が平田先生の最後の弟子、シヨコラ・デジキヤラットさんだで・・・」

「ただの子供に見える・・・」

「並の子供やない。平田先生の後継者だで」

杉浦大統領はでじこの手を取り、飛行機工場へ案内した。そのときだった。

「えらいことや！韓国軍の空襲ですわ！」

「なんだて？」

でじこたちが外へ出てみると、空が赤く染まっており、韓国軍の爆撃機が大江に爆弾を落としていた。あっという間に完成した飛行機

が次々と火に包まれていったのである。でじこたちは工場の中を逃げ惑った。杉浦大統領は工場のラインの最終工程のところまで来た。「まだ無事な飛行機はあるのか？」

「1つだけあります」

杉浦大統領はその飛行機のドアを開けるとでじこたちを乗せた。

「たしかあんたはパイロットやろ？この子達を東京まで乗せていつてくれんか」

「はい」

杉浦大統領はでじこたちが飛行機に乗ったのを確認すると自分は乗らずに飛行機の扉を閉めた。

「杉浦さんは乗らないのかによ」

「わしらたらあ、愛知を離れて生きられやせんがね。ここが死に場所じゃ。そやけど、あんたらは生きなあかん。平田先生の遺志を継いで日本を救うのはあんたしかおらへん。ええか、でじこさん、あんたは生き延びるんだがね！」

でじこたちを乗せた飛行機はまもなく出発した。飛行機が見えなくなった頃、杉浦大統領のすぐそばに爆弾が落ちた。

「これで終わりだがね……。お前らの天下など絶対来えへんわ……。」

そこへ駆け足でやってくる若者がいた。

「おやっさん、しっかり！」

「加藤・・・飛行機は無事に飛んだか？・・・」

「は、はい！」

「それでええ……。でじこさん、あんたがわしの跡継ぎだがね・・・。」

「おやっさん」

「加藤……。でじこさんが生きとる限り日本はやつらのままにならんで……。でじこさんを助けて戦うんやて・・・」

「おやっさん！」

杉浦大統領はまもなく息を引き取った。

75、浜松町の大逆転劇

1時間後、でじこたちの乗った飛行機は調布飛行場に着陸した。飛行場にはMintと杉本侍従長が出迎えていた。正也は父親の前で敬礼をした。

「お父上、恥ずかしながらただいま帰ってまいりました」
すると杉本侍従長は正也を抱きしめた。

「今になってなにを言っている。バカヤロウ、親に心配をかけてと
いいたいが今はそれどころではない」

「邦俊さんもご無事で」

「もう一步で死ぬところでした」

「結局話し合いにならなかったによ」

「いいんだ、相手が死んだ上に戦争では仕方がない」

だがその光景をうらやましく見ているものがいた。邦俊である。邦俊にはすでに父である和彦、祖父平田道明はこの世にいない。久弥の弟、和彦は江ノ島に近い湘南ホテルで板前をしていたが、原口に追われたでじこたちが和彦を頼ってきた時にでじこたちをヨットで逃がしたが自分は原口派に襲われて殺されてしまった。後にでじこたちが原口を倒した後に和彦の遺骨も道明や久弥と共に六甲山に埋葬された。でじこたちは直ちに町田の平田邸へ向かった。

次の日、でじこたちは王様の宮殿に参内した。

「そうですか、そこまでやりましたか」

「陛下、もはや猶予はなりませんぞ。これ以上韓国軍の攻撃を放置しておけばわが国は滅び、民は多大なる苦しみを負うことになりま
す」

「和解の筋は探ってみたのか？」

「それが・・・和解どころか陛下が退位し王制を廃止しなければ交渉には応じないと・・・」

「何たる傲慢！王政の存在そのものが日本にとって必要不可欠とし

いさんも言っていた。それに文句を言うものは大地や水や空気のありがたさを知らぬと同じだと」

大地や水や空気は地球上のどこにでもあり誰でも利用できるが、どれ一つでも欠けたとしても人類はその生活を維持することはできない。日本においても王政そのものがなければ国そのものの存在もないのである。

その夜、でじこは久弥の形見のオルゴールを開けていた。オルゴールから流れる「ワルティング・マチルダ」を聞くとM i n tが泣き出した。

「お父様・・・」

もちろんでじこにとってもこの歌は久弥さんとの思い出でもあった。

「M i n tさん、ワライカワセミってどこにいるのかによ？」

「ワライカワセミですって？ オーストラリアにいますけど」

「つかまえてくるによ」

「それは無理ですわ」

「やらなければいけないによ・・・。久弥さんはでじこに言っていたによ。ワライカワセミの鳴き声は太陽を起こす合図となり、太陽出でて明るい世となるによ」

するとM i n tは笑い出した。

「でじこさん、オーストラリアまで行かなくてもワライカワセミの声を聞く方法はありませんよ」

M i n tはそう言うたポータブルラジオを取り出した。

「お父様がコミケの時に使ったラジオですわ」

無線にも通じていた久弥はコミケの時にはラジオを持参して時刻合わせをしていた。最初はB B Cの流すロンドンのビックベンの鐘の音を合図としていたが、やがてメルボルンから流れる「ラジオ・オーストラリア」の時報に目をつけた。日本時間で午前10時に流れるワライカワセミの泣き声はコミケ開始の合図として格好の時報になったのである。後に久弥が友人を引き連れてコミケに行くようになる「ワライカワセミの声はまだか？」というようになり、「ワ

ライカワセミの声だ！行くぞ！」と言うようになった。後にこの時報は会場内でも流れるようになり、いつしかコミケの開始時にはワライカワセミのコスプレまで出たのである。そしてそれは久弥が原口を倒すためにみんなに与えた合図にもなった。翌朝10時、でじこはラジオのスイッチを入れて待っていた。ラジオからは「ワルディング・マチルダ」のメロディーが聞こえていた。それが時報の手前で止まったのである。すると笑うような泣き声が聞こえてきたのである。

「それがワライカワセミの声ですわ」

そこへ着流しの若者と僧侶がやってきた。

「守道さん・・・」

別室で邦俊が守道から話を聞いた。それは次のような内容のものだった。

下関に韓国軍が上陸した時、二人は懸命に戦ったが結局かなわずに下関の町は大火と共に灰燼に帰してしまったのである。二人は最初は愛知の杉浦大統領を頼っていくつもりで唐戸から船を出して瀬戸内海を渡り伊勢湾を目指した。しかし二人が伊勢湾に到着した時はすでに大江で空襲が始まっており上陸はできなかったという。二人は東京まで船を走らせてようやくでじこの元へと駆けつけたのだ。

その頃、真紅たち6体の人形たちは日比谷公園にいた。先の戦いで壊れた水銀燈の供養のためである。真紅たちの仲間に水銀燈というのがいたが、邪悪な心で人々を惑わしたためにでじこたちに倒されてしまった。王様はそのなきながらを見て真紅に日比谷公園に水銀燈を葬るよう命じた。王様からの下賜金で立派な墓が出来上がった。水銀燈の墓は石を積み上げた箱型で箱の上には道明の銅像が立ち、正面には久弥の肖像画のレリーフがはめ込まれてその下に真紅による水銀燈の墓の碑文が刻まれていた。その下には祭壇も設けられており、真紅が代表して花束をささげた。

「これでは碑文を読まなければ水銀燈の墓とわからないです」

「それでいいのですわ。本当は水銀燈の存在など忘れ去られたほうがいいのです。私は王様の命令に従って墓を立てただけですから。この国では王様の命令は絶対なのです」

そのころ日比谷公園の上をたくさんのカラスが飛んでいるのが見えた。

「なんか不思議な感じがするな」

「他の国では不吉ですわ。でもこの国ではカラスは王室を守るといいます」

久弥が真紅に語った「ヤタガラス」の伝説。三本足のカラスが初代国王の道案内をし、その功績で日本ではカラスは王室を守る鳥とされた。カラスたちは日比谷公園の上を北へ飛んでいった。それは王宮の方角でもあった。

心配になった真紅たちが王宮へ急ぐと、王宮の広間ではすでに一同が勢ぞろいしていた。一同とはでじこ、ぷちこ、うさだ、みけ、ゲマ、美香、ミルフィーユ秘書、ちとせ、邦俊、正也、守道、今村禪師、真紅、翠星石、蒼星石、雛莓、金糸雀、薔薇水晶、そしてMintであった。正面にある金屏風に王様の席が用意され、傍らには杉本侍従長の席が用意されていた。

「ただいまより御前会議を始めます」

一方、韓国軍にもこの情報がもたらされた。ここでの彼らの関心事は「総大將が誰になるか」ということであった。御前会議のメンバーはほとんどが韓国では無名だった。「平田・・・」の名が出たところで「平田道明か?」「いいえ、孫のほうでございます」というと全員が安堵した。ただ一人韓国でも名が知れている人物を除いては・・・。

「最後に一人、シヨコラ・デジキャラットなる人物がメンバーの中におります」

この言葉が流れた瞬間、韓国軍司令部は騒然となった。かつてピョニヤンの独裁者を倒した時に独裁者の宮殿を破壊して人民を救った

人物としてでじこの名は韓国にも知られていた。ましてやでじこは道明と久弥が「平田歴史学」の後継者に指名した人物でもある。「平田歴史学」は韓国には都合が悪かった。

結局、総大将はでじこに決まった。

「すぐに攻撃をかけるによ」

「あわてるな」

邦俊はまず現状調査からはじめた。各地から届く情報を分析した。空襲の被害から韓国軍の規模を予測していた邦俊がふと目に止めた記述があった。それは各地に上陸した韓国軍に対する各地の市民の抵抗であった。各地で韓国軍への抵抗が起こっている記事が掲載されていた。中でも大阪鶴橋での抵抗運動はすさまじかった。在日コリアンたちが韓国軍相手に抵抗運動を繰り広げていたのだ。なぜなら彼らは日本において日本社会と日本人との共存共栄の理念の下にその生活と存在を許されており韓国軍のやり方はこれを根底から踏みにじるものだった。

邦俊はそれらの記録を丹念にメモに取って分類した。祖父・道明から伝わった歴史の極意とは「日々の現実を記録すること」「見聞を広げること」そして「決してあきらめないこと」だった。歴史を学ぶ意味は試験のためというのは本末転倒だ、この国の形を知るために歴史を学ぶのだ、道明はそう教えていた。

そのうち邦俊はある考えに至った。そこへでじこが入ってきた。

「邦俊さん、ワライカワセミの声が聞こえたによ」

午後8時、ワライカワセミの声が放送される時間である。

「よし、相手に一泡吹かせるぞ！」

邦俊はそのまま姿を消した。

町田の平田邸のすぐそばには「旧白洲邸・武相荘」があった。ここは生前から道明とも親交深かった「当代一の目利き」白洲正子さんの邸宅跡である。ここででじこたちは白洲正子さんが日本各地から

集めた一流のものを眺めながら茶室でお茶とお菓子を頂いていた。そこへM i n t が現れた。

「でじこさん、出陣ですよ」

でじこはM i n t を見るなり驚いた。M i n t はゴジック・ロリータ服を着ていたが、一般的に見られる黒や白やピンク色ではなく青色のゴジック・ロリータ服だったからだ。

「これは生前お父様が私のために作ってくださった服ですよ」

M i n t が小さい頃、都議会議員選挙に落選して浪人生活を送っていた久弥があるとき青色の生地を購入して自らミシンで青色のゴジック・ロリータ服を作ったのだった。しかし誰も着るものがないと嘆く道明に久弥は「この子が大きくなったら着せます」といったという。青色を選んだのは久弥が好きな色だったことに加えて青色のゴジック・ロリータ服がないなら自分で作ってやるといった気構えだった。しかしM i n t は背丈の成長が遅かったので久弥の存命中に服を着ることはなかった。

「昨夜お父様が夢に現れてこの服を着て戦えとおっしゃいました・

」

「M i n t さんは死ぬ気にゆ」

「本気かによ？」

「ええ、一度は自殺を考えました。そうしたらでじこさんがお父様に勘当されると止めました。けど国を守るために命を捨てるならお父様も分かってくれますわ。大好きなお父様の元へまいりますわ」

「そう簡単にいくかによ」

M i n t はでじこの言葉に驚いた。

「でじこなら最後まで生き残って悪い奴らを退治するほうを選ぶに
よ」

「久弥さんがM i n t さんでなくでじこを跡継ぎに選んだ理由が分かるにゆ」

A型のM i n t は融通が利かなくてすぐ自爆を選ぶが、O型のでじこは楽天的であくまで生き残りチャンスを待つほうを選ぶ、久弥が

自らの跡継ぎにでじこを選んだ理由はまさにそれだった。M i n t はでじこたちを車に乗せた。

2時間ほどしてでじこたちは大きな搭のある建物に到着した。でじこたちもその建物には見覚えがある、東京ビックサイトだった。でじこたちはM i n tの先導で階段を登った。そこにはすでに真紅たちや杉本侍従長も到着していた。

「これは・・・こんな時期にコミケですかによ？」

「今さらコミケどころではないだろう」

「王様のご命令でここを臨時の王宮にして敵と戦うことにした」
M i n tは驚いた。なぜなら久弥がビックサイトについて詳細に記してきたからだった。

「平田教授から歴史学を引き継いだ久弥はいずれこうなることは分かっていたのだろう。久弥はビックサイトを最後の防衛施設とする考えたっただ」

まもなく砲弾の音が聞こえてきた。韓国軍は川崎まで迫ったのだ。でじこはぶちことぴよことM i n tを誘うと表に出た。

「このままここにいても殺されるだけだよ。でじこたちはあいつら退治しに行くによ！」

でじこたちは東雲から豊洲方向に向かった。

この有様を4階の会議室に居た王様が見ていた。

「夢浮橋（杉本侍従長）あれを見なさい」

「あれは・・・まさか・・・」

「すぐ軍隊を差し向けなさい、てんし遷標たちを死なせることはなりません」

「はっ！直ちに私自ら向かいます」

「頼みましたよ」

急いで杉本侍従長はドアを開けた。そこで王様が制止した。

「夢浮橋（杉本侍従長）！」

「何か？」

「お前も生きて帰ってきなさい。この戦、どちらに非がありますか？」

「ははっ！」

会議室には王様だけが残された。

でじこたちはわけも分からず飛び出したのですぐに力尽きた。そこへ杉本侍従長が兵士を乗せたカーゴで通りかかった。杉本侍従長はすぐにでじこたちを乗せると東京駅方面へ向かった。

一方、韓国軍はすでに品川に迫っていた。東京では韓国軍を歓迎する勢力と反対する勢力が小競り合いとなりあちこちで混乱がおきた。大阪でさえ在日コリアンたちが韓国軍に対してレジスタンスを繰り広げていたのとは対照的だった。しかしまだ多くの放送局が韓国軍に占領されていなかったため通常通り放送が続いていた。邦俊はラジオのスイッチを入れた。

「おつ、Swing Out Sisterか」

文化放送からは生前の久弥が好んだSwing Out Sisterの「Better it Make Better」が流れてきた。よりよい未来を作ろうというその歌詞は久弥の考えと一致していたという。

しかしこれは文化放送にしてみれば救難信号でもあった。韓国軍が品川に迫ったとなるとまず真つ先に占領されるのが浜松町にある文化放送である。邦俊もそれは十分感じていたのかもしれない。邦俊は浜松町に到着すると目の前に韓国軍が迫っていた。

「正也」

「なんだ？」

「冬コミや 時の流れと 人の身は」

「明日待たるる その宝くじ」

これは冬の同人イベントに参加した時の久弥の歌である。

「そろそろいくか？ 正也？」

「ああ」

邦俊と正也はバズーカ砲を手に取り、次々と韓国軍のジープめがけて撃ちまくった。二人に狙われて逃げられたものはいなかった。そこへでじこたちも到着し一斉に韓国軍との地上戦が始まった。もはやでじこが「目からビーム」を使う必要はなかった。韓国軍は大混乱を起こした上、でじこの名が広く知られていたためだった。韓国軍は6、300名の死者を出して敗走し、東京侵入を阻止された形になった。

このニュースは直ちに全国に配信された。中でももつとも驚いたのは名古屋である。

翌日早朝には和歌山沖に停泊していた海上自衛隊の巡洋艦が伊勢湾に入り一斉に砲撃を開始した。これに应えて愛知県民の一斉蜂起が始まったのである。もともと現状維持を望まず政府にも期待していない住民であるが、自己主張が強くあくが濃い県民性だけにまとめることは難しかった。しかし杉浦大統領があらかじめ愛知共和国独立宣言をした際に「隣組」を復活組織させて末端まで強固な組織を作っていたことが愛知県民を団結させたのだ。あつという間に杉浦の片腕で副大統領だった加藤浩正が頭角を現し愛知をまとめてしまった。

一方、在日コリアンたちと占領軍との争いが続いていた大阪鶴橋にもこのニュースは伝わった。かねてから「平田先生の後継者」とされていたでじこである。鶴橋の隣町上本町にはいよいよ平田先生の南十字星が現れるとのうわさが流れた。南十字星が現れば世の中は大逆転する。そう信じた大阪市民がまだ日の高いうちから続々と上本町に詰め掛けてその数は15万人を越え、上町筋を埋め尽くした。午後8時、ラジオ・オーストラリアが「ワルディング・マチルダ」とワライカワセミの鳴き声を流し、それに続いて歓声が上がった。「平田先生の南十字星」は確かに上本町の空に輝いたのである。この瞬間から関西各地で破壊行動が始まった。

道明が愛した上本町ではレジスタンスによる抵抗が続いていた。も

ともこの町では1979年に「ハイハイタウン」ができるまでバラックだらけの粗末な建物が並んでいた町なのである。住民たちは平田先生が南十字星に姿を変えて助けしてくれると信じていた。そのため上本町の空には道明の南十字星の旗が翻っていた。また、上本町駅には大きな幅広ののぼりが立てられて、中央に「天照皇太神宮」向かって右側に「大阪天満宮」左側に「三島大明神」と書かれていた。これは韓国軍が三重に迫った時に伊勢神宮の神官たちが近鉄を使って上本町に逃れた神官たちが道明をしのんで作ったものだった。右側の天満宮は歴史学者だった道明にちなんで、左側の三島大明神は道明・久弥親子が祭られている神社であった。道明が生前「上本町が外国人に蹂躪されることになれば大阪の歴史は終わるだろう。しかし、上本町に南十字星が現れるならば必ず大阪に救いがもたらされる」この言葉を信じる大阪市民は上本町に集まり、平田先生の南十字星が現れるまではと必死になって抵抗を続けていたのだ。神戸の六甲山では平田親子の墓でもある「六甲平田神社」でも集会が始まっていた。

率いていたのは美香である。韓国軍が宝塚大劇場を接收したために公演が中止になってしまったのだ。ところが美香の演説が終わらないうちに早くも三宮では暴動が始まった。上本町に南十字星が現れたと知るや市民たちが抵抗運動を激化させたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3100t/>

デジキャラット・シンフォニー5

2011年5月16日13時55分発行